０４／０４／２５　　礼拝メッセージ　　土井義弘　副牧師

主　　題：先に救われた者の責任
聖書箇所：コリント人への手紙第一　４章１４－２１節

４／１１、私たちはイースター（イエスの復活）をお祝いしました。そのイエスの十字架と復活の後、４０日目にイエスは昇天されましたが、その時、イエスは地上に残される弟子たちに言い残されたことばがあります。大宣教命令と言われることばですが、それをよく見ると宣教（伝道）だけに限定された命令ではないことが分かります。マタイ２８：１８－２０**「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」**。「弟子としなさい」「彼らを教えなさい」とも命令されています。そして、この命令は決して１２弟子たちにだけ託されたのではありませんでした。この命令はイエスを救い主と信じ救われたクリスチャンすべてに対して与えられたものなのです。

☆先に救われた者が教えるべきことは？

私たちには神から「弟子をつくる」という命令が託されています。今、神があなたに期待しておられることは、あなたが導かれて教会に来たように、また、これまで教えられてきたように、今度はあなたが導く側になって弟子をつくり、その弟子を教えて行くことです。今日は、私たちクリスチャンが後に続く者たちに対して、何を教えるべきなのかということについてごいっしょに学んで行きましょう。

１．弟子づくりを教える　　１４－１６節

まず初めにパウロが教えることは「弟子づくりを教えなさい」ということです。単に弟子をつくって行きなさいということではなく、その弟子たちが今度は自分自身が教える者となって、後に続く信仰者を育てて行くのです。

◎パウロにとってコリント教会とはどのような存在であったか？

親と子のような関係です。１６節を見ると**「ですから、私はあなたがたに勧めます。どうか、私にならう者となってください。」**とあります。パウロはコリント教会の人たちに自分を見習ってほしいと願ったのですが、自分のどのようなところを模範として欲しかったのでしょう？それには、この手紙を書いた時のパウロの気持ちを見る必要があります。この手紙の１章から見て行くと、コリント教会の人たちに対してパウロはまるで親のような思いをもち、愛と厳しさからの叱咤激励を与えていることが分かります。教会内で分裂分派という大きな問題を起こしている人たちへの心配と、何とか助けようと励ましているパウロの親心が伝わってきます。ですから、１４節で**「私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとすためです。」**と語っています。また、１５節でも**「たといあなたがたに、キリストにある養育係が一万人あろうとも、父は多くあるはずがありません。この私が福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」**と言いパウロの並々ならぬ親心を私たちは感じるのです。１４節にある「さとす」ということばは、親が子どもに対して教え導き、矯正し、指導することを意味します。コリント教会はパウロの伝道を神が用いてくださった結果生まれた教会です。ですからパウロにとってはまさに自分の子どものような存在であったのです。

◎コリント教会にパウロが見習って欲しかったこととは？

それは親としての自分です。このように親と子のような関係にあったパウロとコリント教会ですが、パウロが敢えて「私にならう者になってください」と言うのは、親である自分を強調し、私のようにあなたがたも親のような存在になってくださいということです。親が子どもの成長を楽しみにし、絶えず気にかけ、子どもたちの模範となって生きて行く…、そのことをパウロは期待したのです。

しかし、実際のコリント教会はパウロの期待どおりではありませんでした。この４章に至るまで、パウロはコリント教会に対してかなり厳しいことを訴えてきましたが、それは１４節で言っている通り、「あなたがたをはずかしめたり傷つけたり、失格者としての烙印を押すためではない、すべてあなたがたのためであり、あなたがたが立派に成長して私のようになってくれることを期待しているから」ということでした。**「この私が福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだ」**と１５節で言う通り、親としての自分を見習ってほしい、自分に倣う者となってほしいと、そのことをパウロがコリント教会に対して望んだのです。しかし、パウロのこのようなコリント教会への思いやりはコリント教会のみに留まらないことを覚えてください。「私を見習いなさい、私を模範としてください」という教えは、ピリピ教会やテサロニケ教会に対する手紙にも見られることです。

ピリピ３：１７**「兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本**

として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」

Ⅰテサロニケ４：１**「終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。」**

Ⅱテサロニケ３：７－９**「どのように私たちを見ならうべきかは、あなたがた自身が知っているのです。あなたがたのところで、私たちは締まりのないことはしなかったし、8 人のパンをただで食べることもしませんでした。かえって、あなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も労苦しながら働き続けました。:9 それは、私たちに権利がなかったからではなく、ただ私たちを見ならうようにと、身をもってあなたがたに模範を示すためでした。」**

これらはその教会の創設に携わったからというのではありません。１７節を見ると**「そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。テモテは主にあって私の愛する、忠実な子です。彼は、私が至る所のすべての教会で教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。」**とあるように、パウロは至る所、どこにおいても同じことを教え、そして、自分が教えるように生きていたのです。彼は福音を宣べ伝え、人々が信仰をもつことだけで「良し」とはしなかったのです。救われて本当の信仰をもったクリスチャンはこのように生きるはずだと、パウロは自分の身をもって証し、その証によって教えて行ったのです。それこそが彼に与えられた責任だったのです。　Ⅰコリント１１：１を見ると**「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。」**とあります。確かに彼は完全ではありませんでしたが、その生き方、進む方向において自分を見習ってほしい、キリストを模範として歩んでいるように、弟子であるあなたがたもイエスを目標に生きてほしいと言うのです。ピリピ３：１２－１４やローマ７：１８－２１を見るとそのことが良く分かります。

ピリピ３：１２－１４**「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」**

ローマ７：１８－２１**「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。:19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。:20 もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。:21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」**

◎あなたにもそのような成長を気にかけている人がいますか？

このようにその生き方をもって後に続く人たちに模範を示すという責任が与えられたのは、パウロのような福音宣教者だけでしょうか？救われた者がそのことばと行ないをもって教え導いて行くという働きは、すべてのクリスチャンに与えられた責任です。皆さんは今、弟子をつくり、その弟子を育てようとしておられますか？あなたにとっての弟子とはだれですか？あなたが重荷をもって励まし、関心をもってあなたのことばと生き方によって成長を願っている方がいますか？もしこのような働きを実践していないなら、あなたは神から与えられた大切な「弟子づくり」という責任を放棄してしまっているのです。

２．知識だけでなく実践を教える　　１７－２０節

単に知識を伝えて行くことで満足するのではなく、その弟子たちの生き方が変わるように彼らを導いて行きなさいというのです。

◎パウロは何を伝えたかったのでしょう？

単なる教え（ことば）以上に、生き方（生活）を伝えたかったのです。パウロは「私にならう者となってください」と言った後、さらにこのように記しています。１７節**「そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。テモテは主にあって私の愛する、忠実な子です。彼は、私が至る所のすべての教会で教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。」**。ここに「私の生き方」とありますが、これはキリストにある生活、つまり信仰生活のことです。パウロはテモテをコリント教会に遣わしました。それはパウロの生き方、生活を伝えるためでした。そのためにはともに時間を過ごすことが必要になってきます。

教会における教育とは、単にことばや知識、概念や考え方の伝達だけではありません。人々がともに居てともに時を過ごすことが大事なのです。実際に、イエスは弟子たちと数年間生活をともにされました。もし、十字架にかかるだけならそのようなことをしなくてもよかったでしょう。しかし、イエスは公生涯に入られてすぐ、弟子たちを選んで彼らと数年間寝食をともにし、身をもって教えて行かれたのです。弟子たちにとってそのことが必要だったからです。たとえば、イエスは弟子たちに「**…みなに仕え**

る者になりなさい。」（マタイ２０：２６）と教えられましたが、そのことをご自分の身をもって実践されました。弟子たちの足を洗い（ヨハネ１３：１－２０**「:4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。:5 それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。」**）、彼らの必要に応え（ピリピ２：６－８**「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」**）て行かれました。また、**「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」**（マタイ５：４４）と言われましたが、それを身をもって示されました。あの十字架上で最大の苦しみの中で、自分を嘲り迫害する者のためにイエスは祈られました。ルカ２３：３４**「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」**と。このようにイエスは私たちに模範を示してくださったのです。私たちも経験することですが、クリスチャンとして生き方、優先順位、考え方、人に対する接し方、話し方などは、ことば以上にその人の証や生き方から力強く教えられて行きます。

◎「ことば」と「力」とはそれぞれ何を指すのでしょう？

「ことば」とは単なる知識、「力」とは行ないのことです。コリント教会の人たちは１：５にある通り**「というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。」**、知識や知恵、つまり「ことば」に長けた人たちでした。１９ｂ，２０節**「…そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく、力を見せてもらいましょう。:20 神の国はことばにはなく、力にあるのです。」**。しかし、実際の行ないは教会内に分裂分派の問題があり、５章を見ると不品行の問題や、６章には信者の間での争い、７章では結婚に関しての誤解などが見られます。それをパウロは「力」ということばで表現しています。ここで「力」と訳されていることばは「表面的な力」という意味の他に、「能力」「精神力」「（ことばの持つ）意味」というような意味があります。ヤコブも２：２６で**「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。」**と教えているように、本当の信仰には行ないが伴うのです。

３．罰があることを教える　　２１節

パウロはコリント教会へテモテを送るだけでなく、自分自身も行く意志があることを伝えます。１８節**「私があなたがたのところへ行くことはあるまいと、思い上がっている人たちがいます。」**。そして、１９－２１節**「しかし、主のみこころであれば、すぐにもあなたがたのところへ行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく、力を見せてもらいましょう。:20 神の国はことばにはなく、力にあるのです。:21 あなたがたはどちらを望むのですか。私はあなたがたのところへむちを持って行きましょうか。それとも、愛と優しい心で行きましょうか。」**と、彼らを戒めようとしたのです。パウロはコリント教会に対して親としての責任を感じ、彼らの成長のために祈り、愛をもって励まし、彼らが間違った方向に進み続けるときには「むち」を打つことによる罰を与えるほどの覚悟をもっていることを訴えるのです。詩篇８９：３２を見ると**「わたしは杖をもって、彼らのそむきの罪を、むちをもって、彼らの咎を罰しよう。」**とあるように、当時の人たちは「むち」を使って罰を与えることもあったのです。

◎罪を犯し続ける人たちの対応に関する教え

私たちはもしかすると勘違いをするかもしれません。何でも無条件で赦すことが愛であると。しかし、みことばはそのように教えているのでしょうか？　もし、私たちの兄弟姉妹が罪を犯した場合、どのようにするのが正しいのか、みことばはどのように教えているでしょう？マタイ１８：１５－１７にある通りです。**「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。:16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。:17 それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。」**。

◎それぞれの選択に応じた報い

ガラテヤ６：７－１０**「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。:8 自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。:9 善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。:10 ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。」**

確かに、私たちは神から選択の自由というものが与えられています。しかし、それゆえに、私たちにはそれに対する報いも与えられるのです。正しい選択ができるようになって始めて、私たちは神に喜ばれる信仰者に成長したと言えるのです。私たちは先に救われた者として、後に続く人たちをしっかり導いて行く必要があるのです。